部会報告

〈拡大学校教育部会〉

☆一九九三年九月二二日（水）
於大阪府同和地区総合福祉センター
公開シンポジウム「これからの解放教育」
司　会＝長尾彰夫さん（大阪教育大学）
パネラー＝鍋島祥郎さん（大阪大学）
前川実さん（大阪府同和事業促進協議会）

大阪府同和教育研究協議会、大阪市同和教育研究協議会の多くの先生方の参加のもと行われた。以下その概要を報告する。

〈長尾彰夫さん〉

現代、解放運動は第三期ということで進められている。そして解放教育についても質的な転換がせまられているが必ずしも明確ではない。

今まで解放教育で取り組まれてきた「学力保障」や「解放の自覚をどう育てるか」といったことをもう一度問い直す時期にきている。日本以外の諸外国で取り組まれていることにも視野を広げて考え直し、何か質的な転換を指向する必要がある。条件は一定そろっている。促進授業、分割授業など、しかし部落の子どもの低学力はまだ残っている。このあたりを、どのように解明し取り組んでいくのかが大きな課題である。

そこで、鍋島さんの方からは、六〇～八〇年代にかけて、部落の子どもの相対的な学力の低さが今だに克服されない課題としてあるということを中心に提起をしてもらい、前川さんからは、部落の子どものアイデンティティと多文化教育ということでお話いただきたい。

〈鍋島祥郎さん〉

私が同和教育を研究し始めたきっかけは、高校進学率推移のグラフだ。『図説　今日の部落差別』（旧版）の中で、部落の子どもと一般の子どもの進学率の差が縮小したのは、主として同和対策事業による生活水準の向上と奨学金制度が導入されたからだと書いてあった。しかし、それは明らかにおかしいと思った。もし同和対策事業がこういう傾向をもたらしたとすれば、対策以後に急激に進学率が伸びるはずだ。ところがそうではなくて、六五年以前から徐々に伸びている。これは要するに、高校増設の時期と重なり、部落の子どもたちも含めて今まで学力的にしんどかった層が高校に入学することになったということが大きい。このことは、部落の子どもたちが集団として学力が劣っているということにもなる。もう一つ特徴として一九七五年以後五％前後の格差を残して、一五年以上にわたって横ばい状態が続いている。これも統計的にみて異常なことだ。

このことから考えても、部落の子どもの低学力の問題はかなり根深く、しかも非常に安定した構造の中から生み出された問題で、一朝一夕にはいかないと考えている。

そこでいろいろな調査や研究について調べている中で、そのことに非常に近いと思ったのが、アメリカの人類学者オグブ（Ogbu. J. U.）の理論である。この人の着目している点のまず一つは、同じようにマイノリティといわれている人たちの中で成功しているマイノリティと成功していないマイノリティに分かれるとしている。

例えばアメリカでは日系や中国系の移民の人たちは、移民した当初はかなりきつい差別を受けるし、仕事も底辺の仕事に就いている。それが、二〇年そこそこの間に黒人の教育達成水準を上回り、しかも白人の平均的な教育達成水準をも上回ってきている。他方、黒人とかメキシコ系のアメリカ人や、先住ハワイ人、先住アメリカ人のようなマイノリティは一向に教育達成水準が上がってこない。そこで、この二つのマイノリティには、かなり質的に違いがあるのではないかとしている。

例えば、教育達成上成功していないマイノリティは、社会の見方や行動する時や自分の意志決定をする時の基準みたいなものが、ドミナント（主流）な白人とか、日系や中国系の移民の人たちとはかなり異なっているとオグブは主張している。そしてそれは、そのマイノリティが社会に参入した時の扱われ方に大きく依存しているのではないかとしている。

例えば部落民は封建制度の中で最下層の地位に自分の意志ではなく強制的に入れられた。黒人も奴隷という形で、つまり、植民地化であるとか、奴隷であるとか、身分制であるとか、そういう形で社会の最底辺に強制的に組み入れられた。

他方、移民マイノリティというのは、自主的にその国に渡って来たわけだから母国に帰るより、差別されてもしがみつけばこの国で何とかやっていけるのではないかということで頑張った。

つぎに、そのことに関連すると思われる日本での例として、三つの部落の大学進学希望者が、生活実態がかなり違うのにも関わらず、非常に似通っているというデータがある。普通大学進学については高校時代ではなく、かなり早い時期に決めている。そうだとすれば、部落の子どもたちは人生のかなり早い時期に大学へ行くということをあきらめている。そういう時点でなぜ部落の子どもは大学をあきらめるのか、大学が与えてくれるかも知れないライフチャンスにどうしてこんな早い時期にと考えると、このあたりにも部落特有の教育観が表れているのではないか。

〈前川実さん〉

部落の子どもの低学力はかなり構造的で根が深い。そういうことについて地域の側や教育関係者がどれだけ真剣になっているのか、という点でもっと厳しく問い直さなければと、一〇年ぐらい前から思ってきた。

最近思うのは昔も今も社会の多様な分野で頑張っている多様な部落民像が

あった。私自身貧しい家庭で、五人兄弟の末っ子で、父親は全然字を知らなかった。母親は小学校三年生までで女中奉公に出て、さまざまな知識を自力で覚えた頑張り屋だった。兄弟五人のうち四人は中学校卒で私だけ高校、大学に行った。その当時としてはいわゆる苦学生だった。

今振り返ってみると、その頃兄が働きだしていて経済的な危機を脱しつつあり、そこに奨学金制度ができるという偶然が重なった。しかし単に経済的な問題だけではないと思っている。私自身の実感として強く残っているのは、私の叔父さんみたいになりたいという願望を小さい時から持っていた。

その叔父さんは、師範学校を出て裁判所の判事になった頑張り屋で、その叔父さんみたいになりたいというのが、自分自身の頑張りの支えになっている。

自分の身近に自分のあこがれる存在があるというのは自分の頑張りに非常に励みになる。実際多様な分野で多彩に頑張っている部落の人がいるし、われわれがもっとそれを掘り起こして子どもに伝えなければならないのではないか。子どももそういう人に出会えばいろいろ自分で考えるし、励みになるはずだ。

ＹＫＫ吉田工業は、戦後の創業で世界一になった数少ない企業だが、先日亡くなった会長の吉田さんは「自分は部落出身だ」と経済界のセミナーなどで堂々と名乗っていたという。解放運動はしていないけれど、自分が部落出身であるということを大事にして生きておられたが、もっと多様な分野で頑張っている人を掘り起こす必要がある。

私自身部落のアイデンティティをどう説明しようかと今も悩んでいる。過去差別の厳しかった時代「部落民」といわれて同じ部落民どうし共感できるものがあったが、今はうすらいできており、部落の子どもには差別を受けてきた部落の歴史というものをいろんな人の生き方の教育を通して丁寧に伝える必要があると思っている。そういう意味では、今日のアジアの現実やアメリカのスラムの現実に触れることによって、部落解放運動がなかった時と立ち上がった時、そして現代とを追体験し、自分たちの存在を見つめ直す上で非常に参考になるはずだ。いろんな出会いをしないと、援助慣れしてしまって、自らの足で立つということが十分できないままになってしまうのではないかと思っている。